

八中3年人権だより

徳島市 八万中学校
3年生 第12号
2024年 9月24日
編集・文 吉成正士

八中文化祭も終え、中学校でのイベントもあとわずかとなってきました。つまり、中学校生活自体が残りわずかになってきたということです。

夏休みが過ぎ、少し気になることがあります。

「みんなに人権学習は残っているのだろうか……」

これはこれまで何度も経験してきたことなのですが、時間が空くと、それまでの思いが冷めてしまいます。それまでいくら熱を込めて取り組んできたことも、長い休みをはさむと、忘れ去ってしまうのです。今のみなさんはどうでしょう。

もし自分事であれば、そういうことはないのだと思います。ということは、やはりどこかで他人事になっていないか、と点検する必要があるのかもしれない。

今学期は、いよいよ皆さんと人権学習ができる最後の季節となりました。まずは皆さんの進路選択、進路決定に絡めての人権学習を行います。「私の目を見て！」という資料です。今から60年以上も前の日本は、中卒生は「金の卵」と呼ばれ、重要な働き手でした。その頃のお話です。読んでください。



「私の目を見て！」

駅からバスに揺られて行くと、やがて、田んぼの中に美しい工場の棟の建ち並んでいるのが、目の中いっぱいにとびこんできました。

『あそこで、今日から勝子の新しい生活が始まるんだ！あの工場の門の中に、何が勝子をまっているのか……』

生まれて初めて、あの川のある部落から離れ、父母のふところから巣立ってきた一羽の小鳥のような勝子は、期待に胸をふくらませています。しかし、そのふくらんだ胸の中にも、かすかな不安が兆すのです。そこには、おそらく差別がまっているだろうからです。

今度はクラスの仲間はいないし、勝子は一人ぼっちです。

今朝、家を出るとき、母は、着替えなどを入れたポストンバックを持って、市電の停留所まで送りにきてくれたけれど、父は、黙ったままで敷居をまたぐ勝子の顔を見つめていたのです。あのときのあの父の顔が、勝子の目に浮かんできます。市電に勝子が乗り込むとき、ポストンバックを手渡してくれながら、

「勝子。機嫌ようして、みんなに可愛がってもらうんやで……」

と言ってくれた、あのときのあの母のかすれ声が、耳によみがえってきます。

勝子は、そのとき、鼻の奥がツンとなって泣けそうになったのです。勝子はそれをこらえ、心の中で、『母さん、おおきに。勝子はがんばるで……。強く生きぬくで！』と誓っていたのです。

勝子と一緒に、この日、この織物工場の門をくぐった中卒生たちは、50人近くもいました。「新しく入社したみなさんに、全工場あげて期待しています」という、工場長

さんの訓話を聞いたあと、勝子たちは、寮に案内されました。寮は、廊下をまん中にして、両側にアパートのように部屋が並んでいる二階建ての木造でした。一つの部屋に六人です。新入社の者が、一人ずつ入ることになったのです。寮母さんから「今度入社された勝子さんです。みなさん仲よくしてあげてくださいね」と紹介されて、勝子の入った部屋には、もう30才ぐらいの人が一人いて、あとの4人は、勝子より二つ三つ年上の人たちでした。部屋の人たちは、みな親切でした。押入れの空いたところを使うようにと言ってくれます。そこには、会社から貸与される布団も一組入っていました。

「分からないことや困ったことがあれば、いつでも言ってくださいね。こうして一つの部屋で暮らすことになったのですから、お互い助け合ってくださいね」

一番年かさの春江さんが言ってくれます。一人一人、名前と出身地を自己紹介してくれました。春江さんは島根で、あとの人たちは鳥取と香川の人が二人ずつでした。

「勝子さんは関西ですって……」

「はい。関西といっても広いでしょ。X市なんです」

「わあ、X市って観光地で有名なところやろ。私、修学旅行で行っただけ。X市のどのへん」

容子という香川の人が、はしゃいで尋ねました。

「名所の多い……そんな街の中と違うの……もう外れの……つまらんとこです」

『どうして私は、あの川のある部落の地名を言わないのだろう。みんな遠く離れた県の人たちだもの、分かるわけがないのに……。山 嵐先生怒るだろな。学校では、あれだけ偉そうに言ってきた私が、こうして、つい部落のことを隠そうとしているんだもの。勝子、平気で言えばいいじゃないの……』という勝子自身の声が、勝子をしっかりとっている……。

しかし勝子は、ついにそのことを言い出せなかったのです。

やがて、一カ月の養成期間が終わりました。養成期間の間は、機械の使い方の講義や実習などがありました。初めて工場へ入って、勝子はびっくりしてしまいました。養成係の男の工員さんから説明されても、何を言っているのか、全然聞こえないのです。糸を巻いたコマがくるくると回り、機械がガチャンガチャンと上がり下がりするにつれて、真白な布地が伸びていくのです。

『さあ、私も、仕事らしい仕事ができるぞ！』勝子の胸には闘志が湧いてきました。

作業もだいぶ覚えられて、職場の人とも仲よしくなってきた、ある日曜日のことでした。勝子が洗面所へ行くと、一緒に入社した隣の部屋の愛子さんがタオルで顔をぬぐっていました。「おはよう」を言い交わしたあと、彼女は声をひそめて、

「勝子ちゃん。この会社に部落の人、たくさんいてるんやって……」

と話しかけてきました。勝子の、勢いよく動いていたハブラシの手がピタリと止まってしまいました。

『とうとうきたのだ。私が人間として値打ちのあるものであるかどうかを試される時がきたのだ……』

冷たいものが背筋を流れていきます。

「何？部落って……」

勝子は、一生懸命、高ぶってくる感情を抑えながら言いました。

「勝子ちゃん、知らんの」

「うん」

「平民の下の者なんよ」

「ふうん。まだ平民ってあったの……」

「よく言うでしょ。部落って……まさか、あんたじゃないでしょうね」

勝子は、何とかして笑顔をつくろうとしますが、どうしても顔がこわばってくるのです。

「……」

「まさか、あんた……」

「もし……、もし、私がそうやったら、どうするの」

勝子は決心しました。隠すことはないのです。恥ずかしがることはないのです。

「そんなことないでしょ」

「そうやったらどうするの」

勝子の声は荒くなってきます。感情の高ぶりを、抑えようとしても、抑えきれないのです。

「そんなことない。そんなことないわ……。でも、もしそうだとしたら、ただの友達なら、何ともないけど……。それ以上は……」

「それ以上って、何のこと」

「たとえば、異性の人やったら考えなおすわ」

「どうして？」

「どうしてって、こわいもの……」

「どうして、こわいの……」

「みんなが、そう言っているもの……」

「それは、愛子ちゃんの先入観と違う……(言うんだ、はっきり言うんだ)それが証拠に、この私がこわい?!」

「……」

愛子の顔色が、変わってしまいました。とたんに真剣な表情になったのです。

「今まで、私とつきあって、こわいと思うたことあった?!」

「ううん……」

「部落っていうのはね、徳川時代にあった、あの士農工商という身分制度なのよ。この四つの身分よりまだ下とされてたのよ。幕府が、百姓町人を、牛のように働かせるために、上見て暮らすな、下見て暮らせ。部落のことと思ったら、お前らはまだまだと言って、支配しやすいように、作ったものよ。その人たちの子孫をいまだに差別しているのよ。それは間違っているのよ」

勝子は、だんだん落ち着いてきて、中学校で習ったことをしゃべり続けました。

「でも勝子ちゃん、今の時代にはもう差別はないでしょ」

愛子は、うつむきながら言いました。

「あなた、今、異性なら考えなおすって言ったじゃないの。それが差別の証拠よ」

「けど……あなたが、そんなとこの人って信じられないわ」

「じゃ、私の目をみて！」

勝子の目には涙がたまってきました。泣いてはいけない、そう思い、こらえようとするのですが、涙はあふれて、頬をつたって落ちました。愛子は、ちらっと勝子の眼を見あげましたが、すぐ目を伏せてしまいました。

「私、あなたに言いたい。あなたは、部落のことを何にも知らずに差別してるんだわ。私、今までも、別に隠してきたんじゃないの。言い出すチャンスがなかっただけ……。私、きっと、あなたに分かってもらう。根くらべしてでも、分かってもらう。あなたが、間違っているってこと……。今日はこれだけにしとく。ハイキングに遅れるから……。さあ、愛子ちゃんも急がなくなっちゃ」

そうは言ったものの、こんな工場の中で、どう闘っていけばいいのか、勝子には分かりませんでした。

部屋へ遊びにやってきた、二階にいる雅子さんが、容子さんたちとしゃべっていましたが、「MさんとYさんがそうやって……」などと情報を告げて、ワイワイと言ったりします。それを聞くにつけても、もうじっとしておれません。1700人の従業員全体に対して、どう闘ったらいいのでしょうか。

◇ ◇ ◇

主人公の勝子は中学時代、被差別部落出身者として、差別をなくしていくための学習や活動を、学級担任の山嵐先生やクラスの仲間たちと徹底して取り組んできました。その思いを胸に、故郷のムラを離れて旅立ったのです。

「恥ずかしいことなんて何一つない。堂々としていればいい」

そう思うものの、不安な気持ちもあります。自分が正しいと思っていることを周囲は受け入れてくれるのか。すでに広まり始めている噂で自分の居場所がなくなってしまうのではないかと。自分が差別や排除の対象となってしまうのではないかと……。そんな勝子の不安をこれからの自分と重ね合わせて考えてみてください。

皆さんと2年半、人権学習を学び合ってきました。そして皆さんは今、次のステージに向けた進路選択の時期です。進路先を決めている人。決めてはいるものの、合格できるかどうか不安な人。勉強が思うように進まず悩んでいる人。まだ決まっておらず悩んでいる人。お家の人と自分の希望が異なり悩んでいる人。自分の決めた進路を周りの人がどう思うかが気になって仕方がない人。様々な悩みがあるでしょう。

また、進んでいった先での不安を感じている人もいるかもしれません。友達はいらぬだろうか。いや、知っている子くらいはいるだろうか。いなくても新しい友達はつくれるだろうか。勉強や部活動はついていけるだろうか。楽しい生活になるだろうか。

勝子さんも進路先への不安を抱えたまま、勇気を振り絞って故郷を巣立ちました。そのうえ、部落差別の不安もあります。皆さんも、たとえ部落差別ではなくても、様々な偏見や先入観にぶつかるかもしれません。そのときどうふるまうのか。これまでの学習を生かすのか、見過ごすのか。生かすとすれば何をどう生かすのか。それがいよいよ試される時がくるといことです。それぞれの進路についての悩みや不安を、みんなで語り合えたらと思います。しっかり考えてきてください。